

博士学位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

2020 年度

中部学院大学

氏名(本籍地)	宮地 弘一郎 (福井県)		
学位の種類	博士 (社会福祉学)		
学位授与の日付	2021 年 3 月 20 日		
学位番号	甲第 9 号		
学位授与の要件	中部学院大学学位規則第 4 条の規定による		
学位論文題目	重症心身障害児(者)との“かかわり”に関する研究 — 生理心理学的アプローチによる日常の心理的生活実態評価から —		
審査委員	中部学院大学	特命教授	堅田 明義 (主査)
		教授	三上 章允
		准教授	水野 友有
	金沢大学	教授	吉川 一義

論文内容の要旨

重症心身障害児(者)(以下、重障児)の中でも、いわゆる「反応の弱さ」と「反応の不安定さ」を特徴とする反応不明瞭な最重度重障児の生活の質(Quality of Life; QOL)の保障はきわめて複雑である。重障児の発達や QOL には、周囲の人による日常的なかかわりが重要であるが、どのようなかかわりが日常生活の中で実現されるべきなのか十分に研究されていない。家族や看護師、介護職など日常の援助者、いわば共同生活者には、反応不明瞭な重障児とのかかわりに困難さを感じている者も多く、その支援も重要な課題となっている。本博士論文では、生理心理学的方法を用いながら重障児とその援助者両方の困難さの背景を明らかにし、また支援するための研究を行った。

本論文は 7 章で構成されている。第 1~2 章では、文献的考察からこれらの問題についての検討課題を整理した。第 3 章以下が本論である。

「第 1 章 重障心身障害児(者)(重障児)の発達と QOL に関する課題」では、第 1 節で重障児の臨床像に基く支援の問題について、特に発達困難の観点から言及した。第 2 節では、重障児の QOL の評価観点、第 3 節では重障児の QOL の要因に関する近年の研究動向、第 4 節では、援助者の困難さの問題について論述した。これらをもとに、第 5 節においては、国際生活機能分類(ICF)に基づいて重障児の QOL の問題を生活モデルから整理し、重障

児の活動・参加の課題と、環境因子となる援助者のかかわりの困難さの課題とが相互作用しているという仮説を立てた。

「**第2章 重障児の理解と発達援助に関する生理心理学的アプローチ**」では、生理指標を用いた重障児の発達研究を中心に、重障児の内面に迫るアプローチの動向を概観した。第1節では、重障児の理解と援助における生理心理学的アプローチの意義を強調した。第2節では、生理指標である心拍指標による発達評価、脳波や脳血流の指標による刺激受容評価について紹介した。第3節では、従来の個別事例において進められてきた生理心理学的アプローチの成果のみでは現場における困難が適切に解決できていないことを指摘し、援助者を含めた社会的視点からの新たなアプローチの必要性を論じた。また、現場で活用できる可能性が伺える新たな生理心理学的方法として、生理指標の瞬目による評価の可能性を述べた。

「**第3章 研究目的**」では、第1章で仮説を立てた、重障児と援助者との日常生活におけるかかわりの困難さについて検証し、またこの課題を解決するための研究を設定した。具体的な目的として、次の3点を挙げた。1) 重障児の援助者のかかわりを調査し、量的、質的な実態を明らかにする。2) 第2章で整理された心拍による重障児の評価法を活用して、日常生活上のかかわりの意義と課題を生理心理学的に解明し、よりよいかかわり環境を提案する。3) 援助者自身が重障児とのかかわりを評価する方法として、瞬目の活用可能性を検討する。なお、重障児の障害状態像は多様で、かつ重障児の生活の場は非常に広いことから、条件を可能な限り統制するために重障児病棟に入所する最重度の事例を研究対象とした。

第4章、第5章では、重障児病棟における重障児のかかわりに関する調査とそれらのかかわりの影響を心拍指標による検討から重障児の心理的生活実態を明らかにした。

「**第4章 重障児病棟における援助者のかかわりに関する研究**」では、援助者のかかわりの実態調査を行った(研究1, 2)。研究1では、重障児病棟のスタッフを対象にかかわり内容に関して質問紙調査を行った。その結果、職種によるかかわり方の違いが明らかになった。具体的には、彼らの生活に深く関わる看護師や介護職について、「顔を見せる」「使う物を見せる」などの視覚へのかかわりの回答率が低かった。また、「反応を待つ」の回答率が低く、教員、指導室職などの発達支援職と比べると個別の重障児とのやり取りをあまり重視していない可能性がみられた。研究2では、病室内の人関連刺激に対する反応のビデオ記録の分析結果から、かかわりが聴覚刺激に偏っていること、また、触刺激などの直接的なかかわりが少ない実態を明らかにした。この結果は教員とのかかわりがない成人事例において顕著であり、研究1の看護師や介護職のかかわり方を反映したものといえた。

「**第5章 援助者のかかわり方と重障児の感覚・認知機能との関連性(心理的生活実態)に関する研究**」では、第4章で明らかになった重障児病棟のかかわりの環境が重障児の発達や生活に及ぼす影響を明らかにするため、心拍指標を用いた4つの研究を行った(研究3, 4, 5, 6)。研究3では、個別の重障児に対するかかわり方に着目し、各感覚系へのかかわりの量的・質的差異と、一過性心拍反応からみた能動性発達水準との関連性を明らかにした。研究4ではさらに、1事例について各感覚へのかかわり方の改善を提案した後に縦断的検討

を実施し、かかわり方の変容が能動性発達に影響することを検証した。研究5では「かかわり間隔」、すなわちかかわりに対して重障児が反応するための時間の重要性について、病室におけるスタッフ達の「かかわり間隔」と心拍との関連性から検討した。結果、「かかわり間隔」の長いかかわりが多い場面ほど心拍変動性が高く、またそのようなかかわりに対して一過性心拍反応の出現率が上昇したことから、反応を待つ意識でかかわる要性が示された。以上の結果と4章の結果から、重障児の現状としての心理的生活実態が明らかになったとともに、援助者が適切なかかわりを提供することが困難な実態も明らかになった。さらに研究6では、日常生活において適切なかかわりを常態化することの効果について実験的に検証し、かかわりを保障することの重要性を明らかにした。

これらのかかわりにおける実態を改善するためのアプローチを第6章で検討することにした。

「第6章 重障児へのかかわりの手がかりとしての瞬目の活用に関する研究」では、日常のかかわりの効果を援助者自身が把握する方法としての瞬目指標の活用の可能性を検討した(研究7, 8, 9)。研究7, 8では、快/不快情動を喚起する環境音を用いて、瞬目が重障児の情動を反映するか検討した。最初に研究7において大学生を対象とした予備実験を行い、刺激と研究方法の妥当性を確認した結果、選定した環境音がそれぞれ主観評価としての快/不快情動を喚起し、また特に不快情動を喚起する環境音系列で瞬目の有意な増加を認めた。これをもとに研究8では、重障児4事例を対象に同様の実験を行った。その結果、特に不快環境音事態で重障児の瞬目が増加すること、快環境音についても重障児の瞬目に影響する可能性が示された。この結果より、重障児の瞬目が快や不快の情動を反映する可能性が示唆された。研究9では、1事例を対象に日常生活場面における安静時とかかわり中の瞬目反応を測定した。その結果、朝・昼・夕方、また平日・休日という時間帯の違いによって瞬目の出現動態が異なることが明らかとなった。一方で、かかわりの受容中は、時間帯に関わらず瞬目の出現動態や瞬目間隔の平均値・中央値に共通性がみられた。以上より、援助者が日常の重障児へのかかわりの効果を評価するために瞬目が活用できる可能性が示された。

以上の研究成果について、終章として第7章で総括した。

「第7章 結論」では、これまでの展開を踏まえ、本研究の結論と今後の課題について論じた。第1節では、第1章で示した重障児と援助者とのかかわりの困難さに関する仮説を検証し解決するための本研究の展開を示した。第2節では、各研究の成果を総合的に考察し、本研究の結論として、重障児の日常生活における心理的生活実態とその課題が明らかとなり、日常生活におけるかかわりの改善点が明らかになった。さらにこれらの結果は、援助者のかかわりの困難さを検証するものでもあった。最後に、第3節において、重障児と援助者達とのかかわりを改善するための方法として、本研究全体を通して明らかにしてかかわり方に基いた評価の導入と、第6章で有効性が明らかとなった瞬目指標を用いたアセスメントの導入によるモデルを提案し、本研究のまとめとした。

論文審査結果の要旨

1. 審査の経過

第5回大学院研究科会議(2020年10月8日)にて、宮地弘一郎氏から課程博士学位予備審査申請論文が提出された旨の報告が研究科長よりあり、予備審査申請の受理の決定が承認された。

予備審査委員については、大学院所属教員から三上、水野の2名が副査として選出され、承認された。なお指導教員である堅田が主査を務め、予備審査委員会は3名で構成することになった。

予備審査申請論文は2020年10月8日の大学院研究科会議終了後に3名の委員に渡され、予備審査結果については2020年11月5日に開催される第6回大学院研究科会議にて報告することとした。予備審査は2020年10月16日午前10時から本大学2804教室で行われた。予備審査は大学院教員全員に対して公開することにした。

2020年11月5日に開催された第6回大学院研究科会議で予備審査結果の報告を行い、本審査申請を可とする結果報告について承認された。

2020年12月23日に本人から博士学位申請書<本審査用>と博士学位申請論文が提出され、2021年1月7日に開催された第7回大学院研究科会議で博士学位申請論文の受理と本審査開始が決定された。学内審査委員として前記の堅田、三上、水野の各委員に加えて、外部委員として吉川一義氏(金沢大学教育学部教授)に審査を依頼した。

公開審査(最終試験)を2021年2月6日(土)に実施し、続いて本審査をおこなった。その結果、委員全員の協議の結論として博士相当の論文であるとの結論に達した。さらに続いて開催された臨時研究科会議で審査結果の報告をおこない、学位の授与について可とされた。

2. 論文の評価と最終試験

1950年代に「重症心身障害」という用語が福祉運動の中で生まれて以来、我が国では重障児の支援が積極的に進められてきた。さらに、重障児の障害の生理心理学的解明と発達援助は、既に半世紀近い歴史があるが、現在でも重障児の支援の困難さは殆ど変わっていないように見受けられる。それは、「個を科学する」アプローチと「社会を捉える」アプローチとが、直接的には交わることなく歩んできたためと考えられる。結果的に、社会としての共同生活者側のQOLが、重障児自身のQOLと並んで大きな課題となってきた。

本論文は、このような重障児の背景を踏まえて、「個を科学する」アプローチのモデルと「社会を捉える」アプローチのモデルを、「社会の中の個を科学する」アプローチとして再構成した非常に独創的な研究である。具体的には、重障児の生活について、生理心理学の手法を用いて心理的な生活実態という視点で解明し課題解決の方法を提案することを目指

した。本論文から得られた成果は次の通りである。

- ① 重障児の共同生活者のかかわりについての調査から、心理学的あるいは発達科学的視点からみたかかわり方の課題が浮かび上がった。そこで、この課題が、実際の重障事例の心理発達や生活の中での心的活動に影響を与えているかについて、心拍指標を基にした生理心理学的研究から検証し、重障児の心理的生活実態を解明した。
- ② 共同生活者が実感を得にくい、日常的なかかわりの意義について、重障児と共同生活者との生活時間を想定した疑似的な実践を設定し、かかわりの作用を検証した。また、かかわり方の変容が重障児の発達を実現することを縦断研究から検証した。これらをもとに、共同生活者のかかわり方の改善について、各感覚モダリティを活用すること、反応を待つこと、短時間のかかわりであっても継続的に行うことを提案した。
- ③ 共同生活者のかかわりを支えるための簡易な生理心理学的的方法論として、瞬目を用いた評価方法や心拍の簡易分析による評価方法を検討し、その活用の可能性を示した。

以上のように、重障児のQOLを向上するための具体的な視点を日常生活の実態に寄り添って明らかにしたことは、重障児の支援において非常に有益なものである。また本論文を通して、社会的な視点から個別の重障児の臨床像の背景を捉えることの重要性と有用性が明らかとなった。本論文のアプローチのモデルは、今後の重障児研究を大きく進展させると思われるのみでなく、重障児以外の障害者研究の発展にも貢献し得るモデルであり、学術的意義および社会的意義の高い研究といえる。

従来の重障児研究では多くの場合、「個を科学する」アプローチが採用されていたが、本論文では、「社会の中の個を科学する」アプローチとして構成されている非常に独創的な研究である。そのために本研究の重要な視点として支援者を共同生活者とみることにある。こ

のことは支援者の関わりが重障児の発達に影響する側面と重障児の反応により支援者のかかわり方が方向づけられる側面があり、これらの相互作用を検討することである。また生活実態と実験という視点で解明する課題解決の方法を提案することも目指した論文である。従って論文の体系性と整合性に考慮しながら研究を進めるには多くの困難を伴うが、それを乗り越えるために9つの研究を重ねている。それにもかかわらず論文全体としての体系性及び整合性は十分に示されている。

最終試験である公開審査では、論文の内容についての確に報告し、質問に対しても適切に応じた。なお博士学位申請論文の提出要件である提出論文の内容にかかわる学術雑誌掲載論文2編が提出され、いずれも単独執筆審査論文であり、学位申請の要件を満たしている。

3. 結論

以上の審査結果から、中部学院大学学位規則第14条に基づき、宮地弘一郎氏の学位申請論文は博士（社会福祉学）学位論文としてふさわしいと判断した。